

121219 冬虫夏草（蛾宿長実粒茸）

南河内の里山を歩いていると...

歩道沿いのサクラの木の小さな樹洞の中に、一匹の「蛾」がとまっていました。
きっと寒さをしのいでいたのでしょうか。

この蛾の名前は「シロスジカラスヨトウ」、羽を広げると50mm強の“ヤガ科”の仲間ですが、主に山地で夏から晩秋にかけて見ることのできる種です。

でも季節はもう冬を迎えており、いくら樹洞で寒さをしのいでいるとは言え、そろそろ寿命も尽きるのではないのでしょうか？

このようなことを考えながら、歩道から分岐する小道を山林内へと入っていくと...

シダの葉の上に、何かすごいものを見つけました！！

薄暗い林内に白いトゲトゲの物体、最初はいったい何なのか全くわかりませんでした。
そこで、近づいてよく観察してみると...

何と「冬虫夏草」だったのです。

さらに驚いたことに、この白いキノコ（冬虫夏草）の「宿主」になっていた蛾の種類は、先ほど樹洞の中にいるところを見たばかりの「シロスジカラスヨトウ」だったのです！！

「冬虫夏草」とは、古くチベットで、この菌は“冬は虫の姿で過ごし、夏になると草になる”と考えられていたことから名付けられたそうです。

さて、この「冬虫夏草」の一種である菌類は、昆虫やクモなどを殺し、その養分を吸収してキノコを生やすのですが、今回、シダの葉にとまった「シロスジカラスヨトウ」に寄生していたのは「ガヤドリナガミツブタケ」という種のように。

長くてわかりにくい種名ですが、漢字では「蛾宿長実粒茸」と書くそうで、これだと何となくイメージできますね。

でもその実態は、実に奇妙な姿をした少々気色悪いものなのですが...

図鑑で調べてみると「ガヤドリナガミツブタケ」は、宿主の体からハリネズミのごとく白いキノコを突き出した未熟な体で越冬した後の夏に、その群生するキノコに孢子入りの黄色い袋を付けて成熟するのだそうです。

「シロスジカラスヨトウ」にとっては、非常に残念な生涯だったものと同情しますが、「冬虫夏草」って意外に身近なところで見ることができるものなのですね...

写真 ・ : サクラの小さな樹洞の中にある「シロスジカラスヨトウ」

写真 ~ : 「ガヤドリナガミツブタケ」に寄生された「シロスジカラスヨトウ」

順に「前」、「横」、「上」、「後ろ」の各方向から撮影しました。











